

関連学会印象記

第9回日本心不全学会学術集会

廣岡 良 隆*

第9回日本心不全学会学術集会は平成17年10月20日から22日まで山口大学医学部循環病態内科学教授 松崎益徳会長の下で山口県下関市にある海峡メッセ下関で行われた。天候にも恵まれ参加者数も多く、そのプログラムの充実さとともにすばらしい学会であったと言える。また、下関は今年の大河ドラマが「義経」でもあり源平合戦で有名な壇ノ浦がある場所であり、ところどころに「源平」という文字を用いた宣伝ポスターがあった。すなわち、「今年、下関が源平色に染まる！」という具合である。下関と言えばふぐで有名であるが、若干早いのが残念であった(とはいえ必ずしも安いわけではないので福岡で食べても同じであるが)。

さて、肝心の学会であるが、心不全学会は今回第9回を迎える。通常参加者数1000人未満規模の学会であり、参加者数は横ばいと聞いていたが、今年はやや多かったようである。それも松崎会長の手腕によるところが大きいものと思われた。また、循環器疾患における心不全の臨床・研究両面からの重要性の大きさが増してきているからでもある。心不全はあらゆる心疾患の終末像であり、重篤な場合の予後は未だ不良である。早期からの治療への介入や重症心不全に対する治療は重要な課題である。そこで、今回の学会のテーマは「心不全における病態研究と先端的治療戦略」が取り上げられたものと考えられる。五つの口述講演会場、一つのポスター・展示会場において中身の濃い講演・発表・討論がほぼ同時進行で行われた。学会の規模に比べて会場が分散したため、多くはプレナリーセッションやシンポジウムに人が集まることになり、いわゆる一般演題の口演を聞いたりポスター発表を見に行くゆとりがなかったのは残念で

あった。また、海外からの講演予定者のキャンセルがいくつかあり、事情があり仕方がないとはいえこれまた残念であった。また、各会場間への移動が不便であったことも否めない。しかし、これらの点を凌駕した充実したプログラムであった。会長及び事務局の努力の賜であったと敬意を表したい。

最初のプレナリーセッションは“Basic Mechanism and Treatment of Fatal Arrhythmia in Heart Failure”でシンポジウムは“Signaling Pathway and New Therapeutic Targets in Cardiovascular Diseases”であった。筆者は後者を聞いたがRainer Schulzによる“Signal Transduction in Heart Failure: Connexin 43 Expression”は心不全におけるシグナル伝達にconnexin 43がいかに重要かを明快に解説され、大変興味深いものであった。心不全における不整脈への関与が示唆された。これから発展するものと思われる。なお、会の始まりは会場の参加者が少ないような印象を受けたが徐々に増えてきた。

その後、特別講演として拡張不全の概念を提唱したことで有名なMayo ClinicのProfessor A. Jamil Tajikが講演する予定であったがキャンセルとなったため急遽、会長講演として松崎先生が講演された。座長は吉川先生で「筋小胞体機能と慢性心不全: カルシウムホメオスターシス」と題して、不全心筋細胞のカルシウムシグナルに関する一連の研究について解説された。松崎会長は心臓生理学に造詣が深く、経食道心エコー検査の発展への貢献が大きい先生でもある。今回の講演では、上記タイトルに関する理解の変化・最新の研究成果まで述べられ、その進歩に感銘を受けた。その一面についても述べられたが、今後の治療への展開が期待される。

*九州大学循環器内科

翌日は、パネルディスカッションで「拡張不全：診断と管理」「慢性心不全におけるデバイス治療」を聴講した。拡張不全の診断は除外診断的なところもあるがこれから質的な診断ができるようになることが期待される。デバイスに関しては cardiac resynchronization がもっとも注目されているが、積極的に応用していきたいところである。確かに、効かない症例も多いが積極的に適応を考えるべきだと感じた。当科砂川は迷走神経刺激の有効性を示し、今後の心不全治療の新しい方向性を示した。心不全はもとより循環器疾患における自律神経異常の重要性は見直されるべきであり、その異常がどのように生じているか、適切なレベルはどこかを明らかにして、新しい治療戦略を目指す時代に入ってきたと感じた。また、LVAS に関する講演もあったが、移植が容易にはできない事情を考えるとますますこのデバイスの改良・工夫が必要となってくる。また、患者によってははずせた人もあり必ずしも全例が移植への bridge となるわけではないこと、取り外せずかつ移植へ回らない患者も多いことは移植の多いアメリカでも同様である。シンポジウムでは「心不全における酸化ストレスと炎症」が興味深かった。Keynote Lecture として

Professor Peter P. Liu がカルシウム拮抗薬やタウリンの抗酸化作用について解説し、北海道大学筒井はミトコンドリア異常について一連の研究成果を報告した。Mitochondrial transcription factor A (TFAM) 過剰発現マウスでは心筋梗塞後の死亡率がゼロであったという点は注目に値する。

最終日夕方まで学会は行われた。プレナリーセッションが二つあり、 β 遮断薬治療についての討議は、やはり、心不全における交感神経系の重要性、適切なレベルを決定しての治療が困難であることを示唆するものである。レニン-アンジオテンシン系の抑制はある程度強力に行えるが、交感神経系は過剰な亢進は病態の悪化を招くが適切なレベルがないと生命が維持できない。あらためて奥深い領域だと感じた。

他にもモーニングレクチャーや教育講演、ランチョンセミナー、サテライトシンポジウムと盛りだくさんであったが、集中力の限界もあり、いくつかをまわるので精一杯であった。これは、最近の循環器学会などのように、本学会が大きな学会へ移行していることを意味するものである。久しぶりに訪れた下関であったが有意義なひとときが過ごせた。